

地域資源インベントリー作成の方法論構築に向けて -茅ヶ崎市及び韮崎市における取り組みに基づいて-

A Study on the Methodology of Making an Inventory of Regional Resources

岡村 祐*
YU Okamura

摘要

地域資源のインベントリー（目録）とは、有形、無形の歴史文化資源や自然資源を地域住民の意図を反映した形でリストアップし、データベース化したものである。地域資源インベントリーの作成に当たっては、第一に、地域に住む人々の生活体験に基づいたものにするということ、第二に、地域資源に関するデータの収集から整理に至る一連のプロセスを分かりやすいものにする、第三に、作成したインベントリーの情報の更新や追加が持続可能であることに十分配慮しなくてはならない。本稿では、茅ヶ崎市及び韮崎市における景観資源調査の実践的プロジェクトを通じて得られた知見から、地域資源インベントリー作成の方法論構築に向けて、人材面、技術面、体制面に関する課題を整理することができた。

I. はじめに

1.1 まちづくりにおける地域資源インベントリーの活用可能性

近年、まちづくりの現場において地域資源のインベントリー（目録）化が重視されている。地域資源のインベントリーとは、有形、無形の歴史文化資源や自然資源を地域住民の意図を反映した形でリストアップし、データベース化したものである。地域資源のインベントリーは、以下のような場面での活用が想定される。

1) 景観形成に関わる計画立案の材料として

近年各地で策定が進められている景観計画や文化的景観の保存管理計画等において、特定の地域の景観特性把握や景観形成方針・基準立案のための基礎データとして活用することができる。

2) 指定・登録文化財の候補リストとして

文化財保護法に基づく文化財種別に関しては、各々の分野での調査の蓄積があるが、近年急速に広がる登録制度や文化庁がモデル事業を実施している歴史文化基本構想を念頭に置いた場合、地域の文脈のなかでの重要な文化財を抽出するのに有効である。

3) 効果的な空間整備に関わる計画事業の前提条件として

地域において公共空間等の整備を行う場合に、地域にとって何が重要なのか、地域資源インベントリーに基づきその優先順位を検討することができる。

4) 観光案内の素材として

地域の見所を紹介するマップの作成や市民主体の地域ガイドの実施に際して、地域の魅力を再認識するための素材を提供することができる。

1.2 既存の地域資源インベントリー

市町村史を開けば石造物のリストや動植物の貴重種のリストが掲載されている。また、周知の埋蔵文化財包蔵地、主要な歴史的建造物（社寺建築、近代建築、近代和風建築等）、あるいは土木遺産等、特に文化財保護の観点からのインベントリーは比較的充実している。しかしながら、このようなリストは、希少性や歴史の古さを評価基準とした学術的価値が重んじられ、必ずしも地域住民の生活感覚に基づいたものではなく、必ずしも上記のような活用に適したものとは言えない。

一方、かつて1960年代後半から1970年代にかけて流行したデザインサーベイ¹というものがある。これは建築学、歴史学、民俗学、社会学等の視点から建物の外部空間、建物、民具に至るまで隅から隅までたい

* 首都大学東京大学院都市環境科学研究科 観光科学域 助教
〒192-0364 東京都八王子市南大沢 2-2 パオレビル 10 階
e-mail okamura@tmu.ac.jp

へんな人手と時間をかけて、図面で記録していくという方法であった。リストという形式で記録されるものではないが、生活空間としての集落を広く捉えるという意思が垣間見える。

その他、各地において地域資源を調査・収集し、整理するという取り組みは行われているが、多くの地域は手探りの状態であり、方法論はいまだ未成熟の段階にあると言える。

1.3 地域資源インベントリー作成の課題

このように地域資源インベントリー作成は各地、各時代で蓄積されてきたものの、冒頭で挙げたまちづくりへの活用を念頭に置くと、現在でも多くの課題を抱えていると言える。

筆者が特に重要な課題として捉えているのは、第一に、地域に住む人々の生活体験に基づいたインベントリーにすること、第二に、地域資源に関するデータの収集から整理に至る一連のプロセスを分かりやすいものにする、第三に、インベントリーにおける情報の更新や追加が持続可能であるということの三点である。

こうした問題意識のもとに、筆者はここ数年地域資源インベントリー作成に関する実践的な取り組みを各地で実施してきた。本稿では神奈川県茅ヶ崎市及び山梨県韮崎市での取り組みに関して、地域資源インベントリー作成の実例として、データ収集の段階及びデータ整理の段階に分け、取り組みの概要を紹介する。そして、上記の課題に対する配慮事項を整理し、最後に地域資源インベントリー作成の方法論構築に向けてさらに取り組むべき課題を提示したい。

なお、両市でのプロジェクトそのものは「景観資源」に限定したものであるが、景観を構成する要素として多様な種類の地域資源が含まれることから、地域資源インベントリー作成の取り組み事例として取り上げる。

II. 茅ヶ崎市における懐島プロジェクト1

2.1 インベントリー作成の経緯

茅ヶ崎市における景観まちづくり団体である「まち景まち観フォーラム茅ヶ崎（以下、まち景）」ⁱⁱ⁾は、2007年4月より懐島地域を対象に「懐島プロジェクト」を開始させた。懐島地域には、南湖の左富士や鶴嶺八幡宮といった市内でも有数の歴史文化資源が存在する。一方、農地と市街地が入り交じった土地利用のなかで、富士山や大山への眺望、農地の広がり、水路、寺社仏

閣、路傍の石仏等から構成される都市近郊の風景を有している。このような地域を舞台に、「懐島プロジェクト」は、地域の歴史、地形、生活に裏付けされた景観資源を紹介した景観まち歩きマップの作成を契機に、地域における景観まちづくりを推進することを目的としたものである。

懐島地域は現在の町丁目と言えば矢畑、浜之郷、円蔵、西久保、鶴が台に当たるが、地域南部に位置する前2地域を対象に、そのマップづくりの基礎データとして景観資源のインベントリーの作成し、2008年10月に景観まち歩きマップ(図1)を完成させ発行したⁱⁱⁱ⁾。

なお、調査体制は、まち景のメンバーの有志11名程度(うち数名は当該地域居住者)であり、著者岡村が調査及びマップ化に関する監修を行った。

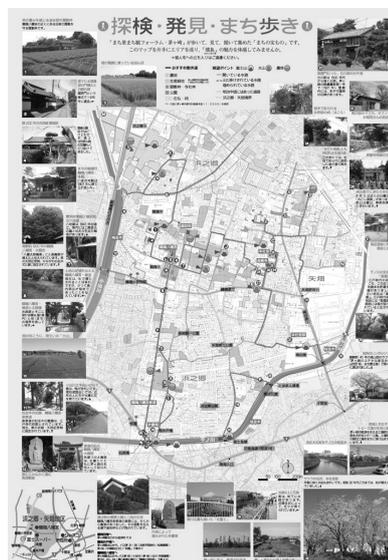


図1 完成した景観まち歩きマップ

2.2 データ収集の段階

データ収集に関する基本的作業は、担当地区を割り振られた各メンバーが、現地を歩き発見した景観資源について、住宅地図上への位置の記入と資源ごとの資源調査シート(図2)への書き込みを行うという方法を採用した。調査シートに景観資源の類型を明示することによって、景観資源の範囲をおおむね揃えることができた。景観資源シートのサンプルは下図のとおりである。

また、足繁く現地に赴くこと、地域住民への積極的なヒアリング調査を行うこと、あるいは調査メンバーのうち当該地域居住者の地域でのネットワークを活用することによって、生活体験に基づいた貴重な情報を収集することに留意した。



図2 景観資源調査シートの記入例

2.3 データ整理の段階

景観資源シートは、メンバーのコンピュータに対する習熟度の差から、Microsoft Word によりデジタル化されているものと紙媒体のものに分かれた。前者のシートも出力し、全ての景観資源について資源類型ごとにファイリングすると同時に、PDF ファイルとしても保存し全てのシートについてデジタルデータとしても蓄積した。

次に、これらを Microsoft Excel 上にて、資源リストとなる一覧表を作成した。また、各景観資源を Adobe Illustrator を用いて地図上にプロットする作業を行い、景観資源図を作成した(図3)。これらの各資源シートに基づいた一覧表及び景観資源図の作成は非常に手間のかかる作業であった。また、地図に関してはアプリケーションの汎用性が低いこと、共有作業が難しいこ

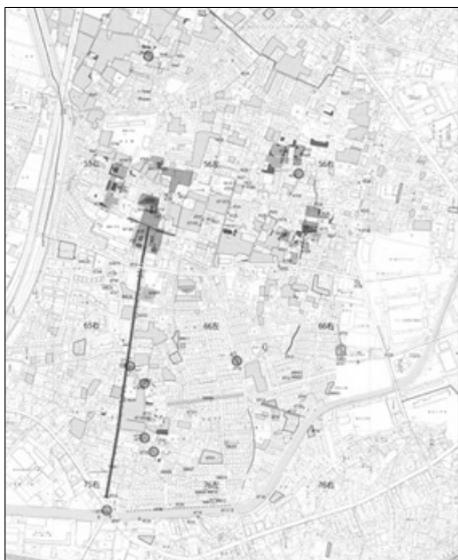


図3 懐島プロジェクト1の景観資源図

とから入力・更新作業は限定されてしまった。

2.4 到達点と課題

調査メンバーの地域のネットワークの活用によって資源所有者や神社の協力が得られたことで、地域資源に関する様々な情報を収集することができ、外からの客観的評価というだけではなく、地域での暮らしに密着した景観資源を抽出することができた。

調査メンバーによって収集されたデータを筆者が一元的に整理するというプロセスを採ったため、インベントリー作成はスムーズに行えた。しかしながら、収集したデータを整理した一覧表、各景観資源シート(デジタル・紙媒体)、及び景観資源図の連携が分かりにくいという問題や、景観資源図は一般的には馴染みのない描画ソフトを使って作成したため、調査メンバーによる情報の更新や追加がしづらいという問題が生じた。

Ⅲ. 茅ヶ崎市における懐島プロジェクト2

3.1 インベントリー作成の経緯

本プロジェクトは、前章のまち景による懐島プロジェクト1の後継として、懐島地域のうち残りの町丁目である円蔵・西久保・鶴が台を対象としたものである。同様にマップづくりを目的に、そのための基礎データとしてインベントリーの作成を試みている。

2009年4月に着手し、本稿執筆時点(2009年11月)でプロジェクトは進行中である。調査メンバーは、まち景の会員のなかの6名が主となり、筆者もメンバーの一員として、また監修役として携わっている。

3.2 データ収集の段階

インベントリー作成のための調査は、前回同様にメンバーによる現地調査を基本としている。ただし、本プロジェクトにおいては、本格調査に入る前に地域の歴史や文化に詳しい住民とのまち歩きを実施し、事前知識を得ることとした。その事前調査の結果は、Google Mapの「マイマップ」の機能を活用し、メンバーが共有できる簡易資源マップを作成した。Google Mapの利点としては、Googleのアカウントさえ獲得すれば、閲覧や書き込みが自由にできる。また、各資源は点としてだけでなく、線や面の情報として表現することができるし、簡単なテキストでの説明を加えることができる。この生活体験に裏打ちされた地域の歴史、文化、自然に関する前提知識をもとに、メンバーは現地赶赴

き資源探しを行うこととした。

現地調査では、前回同様に景観資源シートに関する情報収集、写真撮影、地図上への位置のプロットを行っている。



図4 Google Map を活用した簡易資源マップ

3.3 データ整理の段階

収集した景観資源は、データベースソフト FileMaker を用いてデータベース化することとした^{iv}。FileMaker では、テキストデータや画像データを記載することができ、また Google Map を埋め込むオプションを活用することにより、景観資源の住所情報に対応する形で Google Map 上に景観資源の位置を示すことができる。

一度フォーマットを作成し、データ入力を行えば、景観資源シートごとだけではなく、一覧表形式で閲覧することも可能である。ただし、FileMaker に対する精通度にも依るが、データベースのフォーマットを構築するのに多少の知識と創意工夫が必要となる。

加えて、FileMaker には「インスタントウェブ公開」という機能があり、これによりソフトウェアを直接所有しない人もインターネットブラウザを通じて、ホストコンピュータの FileMaker データベースにアクセスし、データの入力やデータベースの閲覧が可能になる。同時に、この方法を採用することにより、前述の「懐島プロジェクト1」において経験した調査データのとりまとめの労力を大幅に削減することが可能となった。

一方、FileMaker を用いたデータ整理における問題点として2点挙げることができる。第一に、FileMaker に関する知識や外部環境からホストコンピュータへのアクセスを可能とするネットワーク構築に関する知識が求められる。第二に、Google Map 上での景観資源の位置は、住所に対応した点情報であり、正確な位置や広がりをもって示すことが出来ない。地域の景観特性を正確に把握していくためには、別途図面化して検討するという作業が必要となる。



図5 FileMaker のインスタント Web 入力画面（上：基礎情報入力画面、中：写真、下：資源位置）

3.4 到達点と課題

事前の地元識者とのまち歩きによって、生活者の視点、また専門的な視点による情報を収集することができ、その後の資源調査を効率的なものとした。

データ整理に関して FileMaker を導入したことにより、データ入力する側はウェブブラウザによる簡易な入力操作が可能となり、また管理する側は入力結果を即座にデータベース化することができ、作業の省力化に大いに役立った。ただし、FileMaker という一般的には馴染みに薄いソフトウェアでのフォーマットの作成やネットワーク対応等システムを構築するのに若干の専門的知識が求められるということやホストとなるコンピュータを用意しなければならないというコスト上の問題がある。

データの更新・追加に関しては、システムを停止しない限り半永久的に行うことができ、調査主体が維持されれば、継続的に景観資源の把握ができる。

IV. 韮崎市における歴史文化基本構想

4.1 インベントリー作成の経緯

山梨県韮崎市は、2007年に文化庁が公募した文化財総合的把握モデル事業に応募し採択された⁵。歴史文化基本構想では、1)有形・無形、指定・未指定を問わず地域に存在する様々な文化財を特定のテーマやストーリーの下で関連性のある文化財群として整理すること、2)その文化財群を構成する要素を明確にすること、3)重要な区域を定めて保存・管理のための計画を立案することが求められる。韮崎市ではこれを2008年度から3年間かけて、建築学、考古学、歴史学、地理学等の専門家、あるいは市民が関わりながら取り組んでいる。対象地域は全市の範囲を視野に入れながらも、甲斐武田氏関連の遺産が多く残り、また典型的な扇状地の農村集落を基盤とする神山地区に絞って調査が進められている。

調査の段階として、文化財群の設定を念頭に置きながら、建造物、史跡、樹木、石造物、古文書、風俗習慣等の多岐にわたる文化財のインベントリーを作成することが求められている。筆者は、主に集落の文化的景観としての特徴を明らかにするために、集落の景観資源の把握および特性分析に関する調査に取り組んでいる。

4.2 データ収集の段階

今回の調査では、文化財群のテーマやストーリーを見出すことが重視されているということもあり、はじめから景観資源について現地での悉皆調査を行うのではなく、ある程度のテーマやストーリーの頭出しを行ってから資源抽出のための現地調査を行うこととした。

はじめに集落ごとの住民参加型のまち歩き調査を実施し、1時間程度のまち歩きと1時間程度のまとめ作業(ワークショップ)を通じて、生活体験に沿った論点を見出し、地形(大地形、微地形)や水利に関わる景観的特性が抽出された。その結果を踏まえて、これらのテーマに基づく景観資源を現地調査によって抽出し、インベントリー作成に当たった。

現地調査の前半は神山地区のうち北宮地集落と鍋山(北)集落に関して、著者率いる大学院生のチームが担当し、2500分の1の都市計画基本図を500分の1に

拡大した地図上に資源を書き込んでいくという方法を採用した。水路であれば、利用状況、構造(開渠・蓋掛け)、幅員等の情報を加えつつ、写真を撮り現況を記録した。なお、最終的に図面として表現し資源の分布状況や位置関係等を正確に把握する必要があることから、景観資源ごとの独立した資源シートを用いる方法ではなく、直接地図上に表現することとした。

続いて、現地調査後半は神山地区のうち残りの鍋山(南)集落、武田集落、御堂集落に関して、普段は埋蔵文化財調査に従事する作業員の方たち(多くは調査対象集落の近隣住民)の協力を得て前半同様の調査を実施した。

4.3 データ整理の段階

現地調査で地図上に記入した情報をもとに、各景観資源の位置が正確に示された景観資源図をAdobe Illustratorを用いて作成した。この図面化作業と事前のまち歩き調査から浮かび上がってきた地域の景観特性に関わる構成要素を表1のように特定し、現地調査で得られた各資源の位置や特徴に関する情報をインベントリーとして、Microsoft Excel上で整理する作業を行っている。

表1 景観特性と関連する構成要素

| 景観特性 | 関連する構成要素 |
|----------------------|----------------------------------|
| 集落各所から周囲の山々に対する眺望景観 | 富士山への眺望・茅ヶ岳への眺望・八ヶ岳への眺望・白山城址への眺望 |
| テラス状に形成された屋敷地を区切る石積み | 石積みの法面 |
| 池や防火水槽の存在とそれをつなぐ水路 | 池・池跡・防火水槽・井戸・水路 |
| 主要道路沿いの「非街並み形成型」の屋敷地 | 母屋・蔵・ランドマークとなる樹木・石造物(屋敷神) |

4.4 到達点と課題

本調査の前段階に住民まち歩き調査を実施することで、地域住民の日々の生活のなかで感じられている景観的魅力やそれを構成する要素を特定することができた。そのため本調査では、テーマを絞った形で効果的に調査を進めることができた。また、データ収集の後半において、地域、あるいはその周辺に住む調査員を確保できたことも調査を円滑に進める要因となった。

一方、インベントリーへのアクセスのしやすさや情報の更新・追加という点においては、課題が残されている。紙媒体での共有は可能であるが、学部の大学研究室やコンサルト等が作成したものである、インベントリーを管理するソフトウェアに対する技術的な問題や

調査体制等、行政を含め地域が持続的にインベントリを有効なものにしていくには、クリアすべき課題は多い。



図6 韮崎市神山地区の景観資源図

V. まとめ

冒頭で掲げた地域資源インベントリ作成の方法論構築に向けての課題に対して、3つの実践的プロジェクトのなかでの配慮事項を踏まえ、地域資源インベントリ作成の方法論構築に向けて、さらに取り組むべき課題を最後に示したい。

第一の生活体験に基づくインベントリ作成に関しては、本格的な資源調査の前に地域の識者や一般住民とのまち歩きやワークショップを行い、地域の生の声を数多く集めるというステップを踏むことが有効であった。また、本格調査そのものにより多くの地域住民が参画できるような仕組みが求められるが、精度の高いインベントリの作成を目指す場合には、調査目的や調査方法を共有できる人材をどのように確保してい

くかが鍵となる。

第二のインベントリ作成の分かりやすさという点に関しては、調査データを一元化して整理作業を行うという方法は、とりまとめ作業担当者個人にかかる負担が大きいというだけでなく、その後のインベントリの管理を考えた場合に持続性を欠く。今回試したウェブブラウザ等の比較的操作しやすいソフトウェアを使うことで、各調査メンバーによるデータベースへのアクセスや情報の共有を容易にする。ただし、入力フォーマットの作成やネットワーク構築には若干の専門的知識が求められ、これらに対する技術的支援を考えなくてはならない。

第三のインベントリの持続可能性に関しては、インベントリが使われ続けることと情報が常に更新されることが重要である。インベントリ作成段階の課題としても述べたとおり、一般的に馴染みのあるソフトウェアを利用するということによって、日常的な閲覧や情報更新が可能となる。また、ある特定の目的で作成された地域資源インベントリであったとしても、本稿冒頭で示したように様々な活用可能性があり、多方面での活用が望まれる。多くの地域資源インベントリは、まちづくり組織やNPO、あるいは行政が主体となって作成することが予想されるが、どこにどのようなインベントリがあるのか、そうした情報を一元化しておくことが重要であろう。それは行政の役割である。

このように地域資源インベントリの作成が定着するには、多くの課題が残されており、各地の取り組みのなかの創意工夫を発信し、それを共有し方法論を確立していかなければならない。

表2 各プロジェクトにおける課題への対応

| | 生活体験に基づくインベントリの作成 | インベントリ作成プロセスの分かりやすさ | インベントリの持続可能性 |
|------|---|---|----------------------|
| 茅ヶ崎1 | ・ 調査メンバーの地域内ネットワークの活用 | ・ 収集したデータを一元化して整理 | - |
| 茅ヶ崎2 | ・ 事前に地元識者とのまち歩きの実施 | ・ 事前調査情報を Google Map を用いて共有 ・ FileMaker のインスタント Web 公開を活用しウェブブラウザからのデータ入力を実現 | ・ ウェブブラウザで閲覧や情報更新が可能 |
| 韮崎 | ・ 事前に住民まち歩き調査・ワークショップの実施 ・ 地元出身の専門調査員（埋蔵文化財調査に従事）の確保 | ・ テーマ絞り込みによる対象資源の限定 | - |

謝辞

FileMaker を活用したデータ整理手法については、川原先生（首都大学東京大学院観光科学域）にご助言頂きました。

また、茅ヶ崎市では懐島プロジェクトの実施主体であるまち景まち観フォーラム・茅ヶ崎の皆様、韮崎市では韮崎市教育委員会及びマヌ都市建築研究所の各ご担当の皆様には、お世

話になりました。

補注

- i 伊藤ていじ、宮脇檀、神代雄一郎らによって始められ、大学の建築や都市を専門とする研究室を中心に 1960 年代半ばから 1970 年代半ばにかけて広まった。中山（2009）では、「デザインサーヴェイは、調査研究のみにとどまらず、地域共同体の潜在的な問題を顕在化させ、調査活動は間接的に住民の意識を変え、散逸した価値観を収斂高揚させる有力な手段である」と評している。中山（2009）：デザイン・サーヴェイの意義と可能性，建築雑誌 No.1593, pp.10-11
- ii まち景まち観フォーラム・茅ヶ崎は、茅ヶ崎市都市景観基本計画策定の景観資源調査（まちの宝物さがし）に参加した公募市民が中心となり、1996 年 5 月に結成された市民団体である。これまでに、富士山プロジェクトやすてきな家並みづくり等、市内において景観まちづくりに関わる活動を展開している。
- iii マップのデザインや印刷に関しては、市の市民活動助成金である市民活動げんき基金を活用した。
- iv 市民による地域情報や計画情報の入力や利用を可能にする FileMaker のインスタント Web 公開機能と Google Map を連動させた Web-GIS データベースの発想と構築方法については、下記川原の既往研究がある。
- v 蕪崎市の他、岐阜県高山市、新潟県佐渡市、東京都日の出町等計 20 地区 23 市町村においてモデル事業が実施されている。

参考文献

川原晋：「鶴岡における地域の多元的な歴史の総体としての景観づくりーまちづくりプロセスと協議手法、視線 Web-GIS データベースづくりー」（2006ー2008 年度私立大学学術高度化推進事業 3 カ年総括報告書「21 世紀都市・地域づくりの協働実践方法の研究・開発 第 1 部：中心市街地再生景観デザイン研究 3 章」，早稲田大学都市・地域研究所）

(投稿：2009 年 12 月 2 日)

(受理：2010 年 1 月 28 日)